

『アルタシャーストラ』におけるスパイ活動(下)

上村 勝彦

六、スパイ起用による国庫の補充

第五卷第二章では、資金難に陥った王が臨時の税を課し、国庫を補充する方法が説かれている。臨時課税で目的を達しない場合、主税官(samahart)は市民や地方民に、国家の仕事に対し寄与すべきことを要請する。その場合、スパイたちがまずこの上なく寄与する。それを手本として、王は国民に要請する。詐欺学生(kapitika)たちが、わずかしが貢献しない人々を非難する⁽¹⁾。あるいは、賢者に扮した者たちが、ある樹に羅刹の危険があり、人身御供を要すると告げて、市民や地方民に、代償

として金銭を払わせるべきである⁽²⁾。以下、この章におけるその他のスパイ活動を列挙する。

商人に扮した者が、多くの商品と助手たちをともなつて、商取引を行う。彼が商品を資本(担保物)として、信託(niksepa)とローン(prayoga)で富を蓄積したら、夜間、彼の財産を盗ませる。(借金を踏み倒し商人に扮した者は逃亡する。)貨幣検査官や金細工師に扮した者の場合もこれに準ずる。あるいは、商人に扮した者が手広い取引を行い、祭典の際に、借りたり賃借りしたりして、多くの金銀製品を受け取る。あるいは、集会の際に、全商品の合計額を担保として、多くの金銭や黄金を貸り受け、

更に商品を買った代価をも受け取る。それらを夜間に盗ませる。

あるいは、貞女⁽³⁾に扮する女たちにより、反逆的な人々を惑わさせて、彼女たちの家で捕えて、その全財産を没収する。

あるいは、反逆者の家族に不和が生じた時、毒殺者たちが毒を盛る。その罪を着せて、他の人々の全財産を没収する。

あるいは、死を宣告された者⁽⁴⁾が、反逆者に商品や金銭の信託・借金・遺産を要求する。あるいは、奴隷だと言って、反逆者に庇護を求める。女の場合は、反逆者の妻・義理の娘・娘に、女奴隷または「奴隷の」妻だと言って庇護を求める。夜間、彼が反逆者の家の門に寝ている時などに、刺客が彼を殺して、「彼は財物を望んで殺された」と告げ、その罪を着せて、その他の人々の全財産を没収する。

あるいは、聖者に扮した者が、魔術により反逆者を惑わして、自分は無尽の金を得る術をはじめとする種々の術を知っていると告げる。反逆者がその気になったら、

七、人質となった王子の救出

第七巻第一七章では、和平の際に敵側の人質となった王子を、スパイを用いて救出する方法が説かれている。

職人や工芸家(技師)に扮した秘密工作員^(satrin)たちは、人質となった王子の側近くで仕事をし、夜間、地下道を掘って王子をつれ出す。あるいは、前もって敵国に配置された、役者・舞踊家・歌手・演奏家・咄家^(vag. jivana)・吟誦者^(kustava)・綱渡り・奇術師^(saubhika)たちが王の側近くに仕え、自由に出入りする。王子は彼らの一人に変装して、夜中に立ち去る。遊女や、妻に扮した女たちを起用する場合もこれに準ずる。あるいは、王子は彼らの楽器やその他の品の箱を持って出て行く。

あるいは、料理人・給仕人・浴室係・マッサージ師・寝台係・理髪師・化粧係・給水係に扮したスパイたちが、種々の道具を利用して、彼を運び出す。あるいは、姿の識別できない時刻に、王子は召使に扮して、何かを持って出て行く。あるいは地下道を通して出る。あるいは、貯水池で、水遁の術^(varuna yoga)を用いる。あるいは、

聖域^(Galya)で、彼に多くの酒と肉と香を供えさせる。そこに前もって賈金を埋めておき、また死体の肢分や幼児の死体を置いておく。それからその金を彼に見せ、「あまりにも少ない」と言い、再び供養をするために、自らこの金で多くの供物を買いなさいと告げる。彼がその金で供物を買っている時に、彼を逮捕する。あるいは、母親に扮した女が、自分の息子を殺したと言って彼を告発する。あるいは、反逆者の召使に扮した者が、賈金の中に賈金を混せておいて、それを暴露する。あるいは、労働者に扮した者が、反逆者の家で仕事をしている時、盗みの道具や賈金製造機をそこに隠しておく。あるいは医師に扮した者が、薬だと偽って、毒を隠しておく。あるいは、反逆者の側近くにいる秘密工作員^(satrin)が、あらかじめ置いておいた即位式用の道具や敵の密書を、詐欺学生⁽³⁾の口を通じて、公表する。ただし、以上の謀略は反逆者や無法者に対してのみ用いるべきであって、その他の人々に用いるべきではないとカウティリヤは述べる⁽³⁾。

は、商人に扮した者たちが、調理食や果実を売って、守衛に毒を盛る。あるいは、神への献供や祖霊祭や祝典の機会に、彼は痺れ薬の入った飲食物や毒を使用して脱出する。あるいは守衛を籠絡して脱出する。あるいは、市民・吟誦者・医師・菓子屋に扮した者たちが、夜間、富者の家や守衛の住居に放火する。あるいは、商人に扮した者たちが、市場に放火する。あるいは、他人の身体を投げ込んでから、彼は自分の家に放火する。それから彼は、壁の穴や溝渠や地下道を通して脱出する。あるいは、彼は天秤棒につるした瓶で商品運ぶ者に扮して、夜間に脱出する。あるいは、剃髪・結髪の行者たちの仮庵に入り、夜間、彼らの一人に扮して脱出する。あるいは、異形⁽³⁾をとったり、病気を装ったり、林住族に扮したりして脱出する。あるいは、彼は死体に扮して、スパイたちにより運び出される。あるいは、婦人の衣裳を着て、死体につき従って出て行く。

こうして彼が脱出したら、林住族に扮したスパイたちは、彼の行った方角と別の方角を追手に指し示す。あるいは、彼は手品師⁽³⁾たちの車に隠れて脱出する。そして追

手が近づいた時は、彼は潜伏すべきである。潜伏する場所のない場合には、金銭や毒を盛った食品を道の両側に撒いて、別の方角へ逃げる。

捕えられた時は、懐柔その他の方策により追手を籠絡する。または、護送中、毒を盛った食料により追手を殺す。

あるいは、水遁の術や放火に際し、他の死体を置いて、「王子の父は」「汝は我が息子を殺した」と言って敵を非難する。あるいは彼は、密かに隠し持った武器をとって、夜間、守衛に襲いかかり、スパイたちとともに一目散に逃亡すべきである⁽⁹⁾。

八、謀叛の鎮圧

第九卷第三章では、諸々の謀叛を鎮圧する方法が述べられる。ここでもスパイが重要な役割を演ずるが、特に、地方の長・国境守備官・林住族長・武力に服従した諸侯らによる「外部の謀叛」(bāhya-kopa) に対して、秘密工作員(satthi)が次のように言って、彼を敵から離間さすべきであるとする。

し、その際にスパイを起用すべきことを述べる。外部者の友を装った秘密工作員たちが彼らに諜報(cāra)を告げる。

「この王は、反逆者を装った者たちにより、あなた方を出し抜こうと望んでいるから、用心なさい」と。

あるいは、反逆者たちの間に配された、反逆者を装った者たちが、反逆者を外部者から、または外部者を反逆者から離間させる。あるいは、反逆者たちの間に入り込んだ刺客たちが、武器や毒で彼らを殺す。あるいは、外部者たちを呼び寄せて、殺させる。

外部者が外部者を扇動する場合は、扇動者に対して離間策と武力を採用する。友を装った秘密工作員たちは彼らに告げる。

「この王は自らあなた方を併合しようと望んでいる。用心なさい」と。

あるいは、扇動に呼応する者の派遣した軍隊に入り込んだ刺客たちが、武器や毒などにより、彼ら(扇動者)の弱点を攻撃する。それから、秘密工作員たちが、扇動に呼応した者を「扇動者を暗殺したと」告発すべきであ

「彼(敵王)はあなたをスパイだと考えて、主君に対して戦わせるであろう。目的を達したら、彼は、敵・林住族長に対し、または困難な事業に対して、あなたを軍の司令官に任ずるだろう。あるいは、あなたを妻子から離して、辺境に駐留させるであろう。もしあなたが主君との戦いに敗れば、彼はあなたを商品として主君に売り渡すであろう。あるいは、あなたと交換に講和を結んで、主君を満足させるであろう。むしろ彼(主君)の最上の友邦のもとへ行きなさい。」

もし彼が同意したら、その望みをかなえて、彼に敬意を表する。同意しない場合は、敵の王に、「彼はあなたに対して向けられたスパイ」であると告げて、離間させる。そして秘密工作員は、死を宣告された者に持たせた密書(abhiyakta-sasana)⁽¹¹⁾を用いて、あるいはスパイたちにより、彼を殺させる。あるいは、彼と行動を共にした勇士たちを籠絡して味方に引き入れてから、秘密工作員は、主君に用いられていたことを告げるべきである⁽¹²⁾。

第五章では、内部者が外部者を扇動する場合に、離間策と武力(暗殺などの実力行使)を採用すべきであると

る。

内部者が内部者を扇動する場合も諸々の方策(dharmas)が用いられるが、離間策に際しスパイが起用される。友を装った工作員が彼らに、王はあなたが潔白であるか否かを試すために、わざと扇動させているのだと告げる。

あるいは、「誰それはあなたのことを王に告げ口している」と言って、彼らを相互に離間させる。武力行使は「(密かな)刑の適用」⁽¹⁵⁾と同様に用いるとあるから、その場合もスパイが活躍することは言うまでもない⁽¹⁶⁾。

九、友邦と敵の連合に対する

離間工作と暗殺

第九卷第六章の中で、友邦と敵が合同する場合——「友邦が」敵と合同する「危険」(pāramitā)の対策が述べられる。その場合には友邦に働きかけて和平を結ぶのがよいが、もし友邦が和平を望まないなら繰り返し扇動し、秘密工作員(satthi)たちを用いて、敵から離間させ、その友邦を獲得すべきである⁽¹⁷⁾。

あるいは、ある王のもとに自国や他国から何らかの贈

物が来た場合、秘密工作員たちは、それは連盟の攻撃目標（すなわち、征服を企んでいる本巻の主人公）から贈られたというデマの諜報を流す。それが広まったら、征服者は死を宣告された者（abhiyakta）を用いて、「この贈物は私があなたに送ったものである。連盟国に対し戦うか、連盟を脱退しなさい。そうすれば、あなたは約束の額の残余分を受け取るであろう」という内容の密書を送る。それから秘密工作員たちは、それが敵（征服者）に贈られたということを他の者たちに信じさせる。

あるいは、敵に属することが周知の商品を、密かに征服者のもとにもたらす。商人に扮したスパイたちが、それを敵の指導者（mukhya）たちに売る。それから、秘密工作員たちは、その商品が敵（征服者）から与えられたということを、他の者たちに信じさせる。

あるいは、大罪を犯した者たちを、財物と名誉を与えて抱き込み、武器・毒・火で敵を暗殺すべく派遣する。それから一人の大臣を亡命させる。彼の妻子を保護してから、夜中に殺されたという噂を立てる。それからその大臣は、敵王のために、派遣された暗殺者たちを一人一

人摘発する。ただし、もし彼らが主君の命令通りに実行していたら、彼らを捕えさすべきではない。こうして敵に信頼されたら、その大臣は、敵王に、あの指導者（mukhya）から自己を守れと告げる。それから、二重スパイ（⁽¹⁸⁾dhava-veana）が、その指導者を殺すべく送られた敵王の密書を、その指導者に入手させる。

あるいは征服者は、氣力をそなえた者に、「誰その王国を奪え。我々の同盟は前と同様に続いている」という密書を送る。それから、秘密工作員たちが、他の者たちにそれを入手させる。あるいは、工作員たちは、ある連盟者の軍営・補給・援軍を破壊する。それから、他の者たちへの友情のために破壊活動をしたと告げて、その者を連盟から離間させる。あるいは、ある王の勇士・象・馬が死んだり、スパイに殺されたり奪われたりしたら、秘密工作員たちは、それが他の連盟者によって殺されたと告げる。それから征服者は、嫌疑をかけられた者に宛て、「もつとやれば、あなたは約束された額の残余分を受け取るであろう」という密書を送る。二重スパイたちが、被害を受けた王にそれを入手させる。以上のように

して、彼らが離間したら、そのうちのいずれかを味方につける。そして、共同体（sangha）に対する離間策（第一巻）をも採用すべきである。以上が離間策である。次に、実力行使について見る。スパイたちは刺客を放って、種々の状態にある敵を暗殺する。刺客というのは、単独で、全軍に匹敵する仕事、あるいはそれ以上の仕事を遂行する⁽¹⁹⁾。

これらは征服者の領土を攻撃しつつある者に対する方策の一部だが、自分の領土にいる者たちに対しても同様の方策が採用される。しかし、この場合の特別の方策を以下に示す。

自分の領土にいる王たちのうちの一人に、連盟側によく知られた大使を贈物とともに派遣する。彼らはその王を説得して、征服者と講和させるか、あるいは他の連盟者たちを殺害するように扇動する。その王が承知しなければ、彼らは「我々は講和した」と宣言し、二重スパイたちがそのことを他の者たちに伝え、「この王は裏切者である」と告げる。

あるいは、甲が乙を恐れたり敵意を抱いたり憎んでい

たりしたら、工作員たちは甲を乙から離間させる。「彼（乙）はあなたの敵と講和した。遠からずあなたを出し抜くであろう。速やかに征服者と講和しなさい。そして、彼を抑止するよう努めなさい」と言って、あるいは、その他種々の工作をしたり、またはスパイたちが敵を暗殺する場合もある⁽²⁰⁾。

一〇、サンガ（sangha）に対する離間工作

第一巻は一章よりなる短い巻であるが、サンガ（共同体、共和国）に対する政策を説く重要な箇所である。

サンガ及びそれに対する離間策はすでに他の小論で検討したので、ここでは、この巻におけるスパイの活動の概略を紹介するにとどめる。

秘密工作員（satra）たちは、「あの男はあなたを中傷している」などと言って、サンガの指導者たちを離間させる。学匠（⁽²¹⁾paṇḍita）に扮した者たちは、学問・芸術・賭博・娯楽について、子供じみた喧嘩を起こさせる。刺客たちも、娯家や酒場において、指導者たちを相互に反目させるように計る。サンガにおいては、原則として、支

配者層を構成する人々の身分は平等であるが、おのずから、経済的・社会的な格差が生じたようである。「平等」であるからこそ、格差に対する不満が強まる。スパイたちはこの不満を利用して、社会的な混乱をひき起こす。

君主は「王」(首長)の位の継承をめぐる争いが起きるように工作する。王位をめぐる二派が争っている時、酒屋に扮したスパイたちは、息子や妻が死んだという口実で、「手向けの酒」であると称し、痺れ薬(madanarsa)を人々に飲ませる。秘密工作員たちは、征服者からあるサンガの一員に託されたかのように見せかけた金銭を暴露して不和を生じさせる。あるいは、ある自惚れの強い指導者の息子に、実は征服者の息子であると信じさせて、サンガに対して戦わせ、目的を達したら彼をも殺す。遊女屋の主人、芸人等に扮したスパイたちは、若く美しい女たちを用いて指導者たちを惑わし、彼女をめぐる諍いを起こさせ、互いに殺し合いをさせる。あるいは刺客に一人を殺させたり、または彼女自ら毒を用いて殺す。あるいは聖者に扮した者が、媚薬と称して毒薬を用いる。

る。

唯一君主(eka-rāja)はサンガに対してこのような離間策を実行すべきであるが、サンガの指導者たちもこのような諜略から自らを守り、道義的にふるまい、人々の信頼を得るように努めるべきであると勧められている。⁽²²⁾

一、弱小の王のスパイ活動

第一二巻は「弱小の王の行動」(atulya)と題されている。弱小の王は可能な限り和平を求めるべきだが、それでも相手が攻撃してくるなら、前巻の「サンガに対する政策」や、次巻の「術策による誘殺」を用い、また刺客や毒殺者たちを用うべきことが第二章において説かれる。⁽²³⁾

遊女屋の主人は、若く美しい女により、敵軍の高官たちを惑わし、刺客たちが諍いを生じさせ、離間工作をする。あるいは、聖者に扮した者が、愛欲に支配された高官に、媚薬と称して毒を与える。あるいは、商人に扮した者が、王妃の側近に仕える侍女を愛するふりをしてから捨てる。彼の召使から教わったと称して、聖者に扮

女スパイたちは、富裕な寡婦、秘密の職業を営む女、芸人などに扮して、サンガの指導者たちを惑わす。密会の場所にやって来た男を、刺客が殺すか拉致する。

あるいは、秘密工作員は、女好きのサンガの指導者に女を奪うように勧める。聖者に扮した者は、他の指導者たちの間で、「この指導者は私の妻(あるいは嫁、妹、娘)を犯した」と告発する。もしサンガがその指導者を罰しようとするなら、王(征服者)は彼を支援して、対立者たちと戦わせる。もし罰しようとしなければ、刺客たちは、夜間、聖者に扮した者(「死を宣告された者」)その他、殺されてもかまわない者が聖者に扮しているのである)を殺す。それから、他の聖者に扮した者たちが、「あの指導者はバラモン殺しである」とか「バラモンの妻の愛人である」とか告発する。

あるいは、占者に扮した者は、ある男に求婚された娘が王妃か王母になるであろうと予言して、別の男に力づくで彼女を奪うように唆して、諍いを生じさせる。

あるいは、比丘尼スパイは、妻を愛する指導者に、別の男が彼女に言い寄っていると告げて、諍いを生じさせる。

した者が彼女に、商人に愛を起こさせる媚薬を与える。

商人は再び彼女を愛するふりをし、薬のききめを信じさせる。王妃は彼女から勧められて、その媚薬——毒とすりかえておく——を王に飲ませるのである。あるいは、占者に扮した者が、高官に、「あなたは王の相をそなえている」と告げる。比丘尼スパイは、彼の妻に、「あなたは王妃か王母になる」と告げる。あるいは、妻に扮した女が⁽²⁴⁾高官に「王が私に言い寄っている」と告げる。あるいは、料理人や給仕に扮した者は、王があなたに毒を盛れと命令したと高官に告げる。商人に扮した者がその言を裏づけ、目的が達成できるのであると高官を扇動する。⁽²⁵⁾

また、彼の城砦都市においては、城代(sūnyapala)の側近に在る秘密工作員たちは、王が窮地に陥っているので城代は略奪を企てていると、市民や地方民に告げる。この噂が広まったら、刺客たちは市民から略奪し、高官たちを殺害し、「城代に従わぬ者はこうなる」と告げる。そして城代の住居に、血のついた武器その他を投げ込んでおく。それから、秘密工作員たちは、城代は人々

を殺害し、略奪していると告発する。同様にして、彼らは地方民を主税官(samāhant)から離間させる。一方、刺客たちは村の中で主税官の配下たちを暗殺して、「地方を非法により圧迫する者たちはこうなる」と告げる。混乱が生じたら、彼らは城代や主税官を、臣下の謀叛により殺させる⁽²⁶⁾。

「敵の高官の殺害」は第三章に続く。敵王や王の寵臣の側近くにいる秘密工作員たちは、王が軍の高官たちに対して怒っているという噂を広める。それから刺客たちは王の名において高官を呼び出して殺す。秘密工作員たちは、他の人々に「命がおしかったら亡命せよ」と勧める。また、ある人々が王に何かを要求して拒否された時や、要求したものを与えられた時や、要求すべきものを要求しなかった時に、秘密工作員たちは彼らに、王が怒って彼らを殲滅しようとしていてと告げ、前と同様に行動する。あるいは、敵王の側近くに仕える秘密工作員は、ある大官が敵(弱小の王)と内通していると王に信じさせる。それから、弱小の王がその大官に宛てた密書を敵に入手させて、その大官の裏切りを証明する。ある

いは、軍隊の高官や臣下⁽²⁷⁾たちを買収して、自国に対して戦わせるか、または誘い出す。

あるいは、弱小の王は、秘密工作員たちを用いて、無視されている王子や、王位を狙う王家の一員や、不遇の王子たちを扇動する。または、林住族長を買収したり、敵の背面の敵、敵の友邦などと連盟する⁽²⁸⁾。

第四章では、武器・火・毒を用いる実力行使が説かれる。敵の城砦都市においては商人に扮した人々が、村においては家長に扮した人々が、諸地方の境界においては牛飼や苦行者に扮した人々が、隣国の王・林住族長・王位を狙う王家の一員・不遇の王子たちを籠絡して、彼らとともに敵国の諸構成要素の弱点を攻撃する。あるいは、敵の軍営において、酒屋に扮した者が、死を宣告された者(adhivāta)を息子に仕立てて、攻撃の際に毒で彼を殺して、「これは手向けの酒である」と称して、痺れ薬を入れた多くの酒の瓶を配る。混り物のない酒か四分の一の毒を入れた酒を第一目に与え、その後、毒を盛った酒を与える。あるいは、軍隊の高官たちに混り物のない酒を与え、酔った時に、毒入りの酒を与える。あ

るいは、軍隊の高官に扮した者が、死を宣告された者を息子に仕立て、以下前と同様に行動する。

あるいは、調理肉や調理米の業者、酒屋、菓子屋に扮した者たちが、毒を混ぜた商品を敵に信用貸しで売る。あるいは、婦人や子供のスパイたちが、酒・乳・凝乳(gāhi)・サルピス(精製バター)・油をそれぞれの業者から受け取り、毒を塗った自分の容器に注いでから、無理な注文をして、もとの場所にそれらを返す。あるいは、商人に扮した人々か、商品を売るために運ぶ人々が、これらの商品に毒を混ぜる。敵の側近くにいる者たちは、象や馬の飼料や草の中に毒を盛る。あるいは、労働者に扮した人々が、毒を混ぜた草や水売る。あるいは、長い間敵と交際している畜牛業者たちが、攻撃の際に、牛や羊や山羊の群を放って敵を混乱させる。また、馬・驢馬・駱駝・水牛たちのうちで性の悪いものを放つ。あるいは、畜牛業者に扮した者たちは、麝香鼠⁽³⁰⁾の血を動物たちの眼に塗って放つ。あるいは、獵師に扮した人々が野獣を蛇捕りが毒蛇を、象使いが象を放つ。あるいは、火で生活する人々が放火する。あるいはスパイたちが、

退却する敵軍の高官たちを殺したり、高官たちの宿舎に放火する。

以下、敵軍を攪乱し、補給・援軍・糧秣徴発隊(vivadhā-gātrāpāstra)を断ち、混乱に乗じて敵王を殺す方法が述べられる。刺客たちは、敵王が狭い場所に居たら火により、砂漠に居たら煙(毒ガス)により、居城に居たら毒により、水に飛び込んだら狂暴な鰐や水中を潜行する者⁽³¹⁾たちにより殺す。あるいは放火して、宿舎から飛び出した彼を殺す⁽³²⁾。

二、城砦の攻略、及び敵軍撃破の法

第一三巻は「城砦の攻略法」(durgalambhopāyāh)と題されている。その第一章では、扇動(upatāpa)について説く。敵の城砦都市を得んと欲する征服者は、一切智を有し、神々と交際していることを宣伝する。例えば、異国にいる情報員が放った伝書鳩によりいち早く異国のニュースを知ることなどにより、一切智であると人々に信じさせる。あるいは、火神(Agni)や竜神(Nāga)や水天(Vaṇṇa)に扮したスパイたちと会話をしたりするこ

とにより、神と交際があると信じさせる。占者・前兆学者・占星家・プラナ学者・予言者・スパイたちが助手をつとめ、目撃者となったり、宣伝したりする。

使節に扮した者たちは、敵の高官たちに、主君（征服者）が彼らに好意を抱いていると告げ、また、征服者の側が力をつけ、敵側が崩壊するであろうと告げる。そして、敵の大臣や兵士たちに、彼らが征服者と安危を同じくしていることを告げる。こうして、前述のように敵方の誘惑可能分子を扇動する。彼らが応じない場合には、その妻や子に「工作員たちが」装飾品を贈る。また、飢饉・盗難・林住族の害がある場合、秘密工作員たちは、市民や地方民を扇動して、「我々は王に援助を要求しよう。もし援助してくれないなら、他国へ行こう」と告げる⁽³⁵⁾。

第二章では、「術策による敵の誘殺」(yoga-vamana)が説かれる。山窟に住む四百歳の隠者に扮したスパイは、多数の弟子とともに敵の都の近くに滞在する。弟子たちは大臣や王に、導師に会うようにと勧誘する。王が訪問したら、彼は古の諸王や国々についての思ひ出を語り、

「百年ごとに私は火に入って、再び幼児となる。今、あなたの前で四回目の火に入る。三つの願いをかなえてあげます」と告げる。王が承知したら、妻子とともに七日間そこに滞在しなさいとすめ、滞在中の王を襲撃すべきである。あるいは、秘密工作員たちは、聖者に扮した者が埋蔵金のありかを知っているという噂を広め、王をおびき出して、前例と同様にやって殺す。あるいは、聖者に扮した者が、夜間、燃火に包まれて、人気のない場所に立っている時、秘密工作員たちは、王に「この聖者は幸運を予見する者(samedhika)である」と告げる。以下、前と同様にする。あるいは、聖者に扮した者は、幻術(vandhaka-vishva)によって王を籠絡し、以下、前と同様にする。あるいは、聖者に扮した者は、人々に尊崇されてる土地の守護神に絶えず帰依し、諸構成要素の長たちを籠絡して、次第に王を出し抜く。あるいは白髪

の結髪行者に扮した者が、土手の地下道や地下室に住み、水に住むと称する。秘密工作員たちは、王に、彼は水天か竜王であると告げ、以下、前と同様にする。あるいは、地方の境界に住む、聖者に扮した者は、敵王(征服者)の調伏法を修すと称して、王を誘い出す。王が承知したら、外部から遮断された道場で王を殺す。商人に扮した者たちは、王に馬を献上すると称して王をおびき寄せ、馬の検査に没頭している王を殺す。または、馬の中にまぎれ込んだ王を、馬を用いて殺害する。あるいは、刺客たちは、聖樹の上で管を吹いて音を出して鬼神に扮し、「我々は王が高官たちの肉を食うであろう。我々のために供養せよ」とほめかす。前兆学者や占星家に扮した者たちはそれを解釈する。(王が供養を行ったら、その間に王を殺す。)

あるいは、竜神の姿をした者たちが、「燃える油」を体に塗り、夜間、聖なる池や貯水池の中で、鉄の槍と棍棒を砕きつつ、同様に告げる。あるいは、熊の皮をまとった者が、火と煙を吐き出し、羅刹の姿をとって、都の周囲を左まわりに三度まわり、犬とジャッカル⁽³⁶⁾の鳴き声の間に、同様に告げる。あるいは、聖域(citya)の神像を、夜間、「燃える油」や雲母の層に被われた火によって燃やし、同様に告げる。他のスパイたちがそれを宣伝する。あるいは、尊崇されている神像から、動物の血を

用いて、多量の血を流出させる。それから他の人々が、神像から流血がある場合は戦争で敗れる、と告げるべきである。あるいは、月の変り目(新月)の夜々に、墓地の前に立ったまま食われた人の死体を置いて、そこが羅刹の聖域(citya)であることを示し、それから羅刹の姿をした者が、人身御供を要求する。勇気ある人々が見に来たら、他のスパイたちが鉄の棍棒で殺し、羅刹によって殺されたようにみせかける。それを見た人々や秘密工作員たちが王に報告したら、前兆学者や占星家に扮した人々は、その鎮静法や贖罪法を行わなければ、王と国土に大なる災いがあると告げる。王が承知したら、「これらの修法においては、七夜の間、王自身が一つ一つの真言(manttra)、施食(bali)、護摩(homa)を行わなければならない」と告げ、以下、前と同様にする。

あるいは、象林の守護官たちは、象を好む敵を、瑞相をそなえた象によって誘惑する⁽⁴¹⁾。彼が承知したら、彼らは彼を密林や一人しか進めぬ場所におびき寄せて殺すか、または拉致する。狩猟を好む敵の場合もこれに準ずる。

あるいは、秘密工作員たちは、財物や女を渴望する敵を、富裕な寡婦たち、若く美しい女たち、遺産や信託物を諍うために近づいた女たちを用いて、誘惑させる。彼が女と密会している時、彼らは武器や毒で彼を殺す。

あるいは、敵が聖者・遍歴行者・聖域・塔・神像のもとに屢々訪れる場合、地下室や地下道や秘密の壁⁽⁴²⁾に入り込んだ刺客たちが敵を殺す。刺客たちは、王が観劇したり、行楽を娛しんだり、水遊びをする時、その他、誕生式や葬式などの式典の際、不注意になり護衛なしで行動する際、悪天候や雑踏において、バラモンの集会や火事の際、人気がない場所に入った際などに王を襲撃する⁽⁴³⁾。

第三章は「スパイ起用」(apasaṃpa-praṇidhi)と題されている。征服者は信頼できる武士団(seni)の長に偽りの亡命をさせる。彼は敵に庇護を求め、味方であると称して、自国から助手や協力者たちを受け入れる。あるいは、彼は主君(征服者)に属する反逆的な都市や軍隊や背面の友邦を撃つて敵を信用させる。それから主君は、象の捕獲や林住族討伐を口実として、彼と協力して攻撃する。大臣や林住族長を起用する場合もこれに準ずる。

敵と友好関係を結んでから、征服者は大臣たちを罷免する。彼らは敵に主君との仲をとりなしてくれと頼む。敵が征服者に使節を派遣したら、征服者は使節を叱責して、「汝の主君は余と大臣たちを離間させる。二度と来るな」と言う。それから、一人の大臣をわざと亡命させる。彼は敵に庇護を求め、味方の情報を敵に知らせる。敵に信用されたら、彼は敵の要人たちが征服者と内通していると告げる。それから、死を宣告された者(cāhiti-yāketi)に持たせた彼ら宛ての征服者の密書を摘発して、彼らを殺させる。あるいは、彼らを鼓舞して、敵王に対して決起させる⁽⁴⁴⁾。

以下、征服者の採用すべき様々な術策(yoga)が述べられる。例えば、敵とその友邦が離間しないなら、一方に他方の領土を与えると約して取引をしてから、友を装う者や二重スパイたちを用いて離間工作を成功させる⁽⁴⁵⁾。あるいは、獵師に扮した者たちは、肉を売って敵の城門に立ち、門衛と仲よくなり、盗賊の接近を二、三度敵に告げ知らせてその信頼を得る。それから、征服者の軍を二手に分けて駐留させ、敵に「盗賊の群が近づいた

から、大軍を出して下さい」と告げる。その軍を一方の攻撃軍と戦わせている間に、もう一方の軍隊をつれて行って、夜間、城門において「わが軍は盗賊討伐を終えて帰還した。城門を開けよ」と告げる。あるいは、あらかじめ配置されていたスパイたちが城門を開ける場合もある。かくて、城を急襲して奪う。あるいは、職人・工芸家(技師)・異教徒・役者・商人に扮した兵士たちを、敵城に配置する。家長に扮した者たちは、材木その他の商品を運ぶ車により、彼らに武器類を運び込む。それから彼らは、油断した者を殺害し、味方の急襲を支援し、敵の背面を攻撃し、螺貝や太鼓の音とともに、「入城したぞ」と告げ知らせる。彼らは胸壁(brahma)の門や塔を開け、敵軍を分断したり破壊する⁽⁴⁶⁾。

一方、この章では、林住族や盗賊に対するスパイ工作についても言及している。これは、自国内にせよ敵国内にせよ、征服者に有害な者たちを対象としたものであるう。

スパイたちは、森林付近で、盗賊たちに牧場や隊商を襲撃させる。住民たちは、協定のごとく痺れ薬を入れた

飲食物を置いて退去する。牛飼や商人たちは、痺れ薬が効力をあらわした時に、盗賊を襲撃すべきである。あるいは、サンカルシャナ神(バララーマ)の信者を装う、剃髪または結髪の行者に扮した者が、祭典の際に、痺れ薬を用いてから、盗賊を襲撃する。あるいは、酒屋に扮した者が、祝宴などの際に、林住族に対して痺れ薬の入った酒を飲ませてから、襲撃する。あるいは、スパイたちは、町村に侵入した林住族を分散させて撃破する⁽⁴⁷⁾。

第四章では具体的な城砦の攻略法が説かれるが、その際、城内の守衛になりましたスパイたちは、マングース・猿・猫・犬の尾に焼夷弾をつけて、敵の諸施設に火を放つべきであるという⁽⁴⁸⁾。続いて、可燃物や焼夷弾の製造法が説かれる。

あるいは、スパイたちは、援軍が来て攻囲者を攻撃中であるという偽の情報を敵に信じさせて、敵を城外に誘い出す⁽⁴⁹⁾。

第五章では、奪取した敵の領土を鎮静させる種々の方法があげられている。その場合にも、スパイは重要な役割を果たす。

秘密工作員たちは、地方・都市・カースト(jāti)・サンガ(saṅgha)に対して、敵王の悪しき行為を示し、また主君の強運や彼らに対する愛情を示し、また主君が彼らを尊敬していることを示すべきであるとされる⁽⁵⁰⁾。

第一四巻「秘法に関すること」(aupaiśadika)の第一章で、敵軍撃破の法が説かれる。そのうち、直接スパイが関与する箇所のみを引用して、この稿を終えることにする。

「信頼さるべき出身地・服装・技術・言語・生まれを有すると称した、僞僕・侏儒・山岳民(kirāta)・哑者・聾者・魯鈍・盲人を装う、蛮族(mleccha)出身の、敵に取り入った男女を用いて、敵の身のまわりの品に、カーラクータ(猛毒の種類)などの種々の毒を盛る。スパイたちは、王が娯楽の品や所蔵物を楽しんでいる間に武器を用いる。また秘密工作員(sattajīvin)たちは、夜警や火で生活する人々に扮して、放火すべきである⁽⁵²⁾」。

註

- (1) Aś, 5.2. 31—34.
(2) Aś, 5.2. 41.

- (3) sādhi. または女の修行者。
(4) abhivṛakta はよく謀略に利用されて犠牲にされるが、任務を命じられる際、目的を達成した暁には罪を許すと約束されて行動すると思われる。

(5) 以上 5.2.47—69.

(6) bhāryā. カングレーは人質となった王子の妻とする。

(7) vīṛpa. Cf. 14.2.4ff.

(8) cakra-carā. 「上」の註(77)参照。カングレーは 'cartmen' と訳す。

(9) 以上 7.17.32—61.

(10) rāṣṭra-mukhya. カングレーは主税官(samāhartṛ)を指す⁽⁵¹⁾。

(11) Cf. Aś, 2.5.4; 5.2.44, 55, 65; 9.6.29; 12.4.4; 12.5.29; 13.3.14, 39; 13.4.23. この場合、謀叛人に宛った主君の密書を運ぶ abhivṛakta を敵王に示し、その謀叛人が主君と通じていたと信じさせて、彼を殺させるのである。

(12) 以上 9.3.26—33.

(13) 内部(abhyantara)と外部(bāhya)とについては、cf. 9.3.12, 22.

(14) ayaṇ rājā. これは離間策であるから、「上の王」は外部の扇動に呼応した外部者(諸侯)を指すと思われる。カングレーはこれが離間策であることを無視している。

- (15) daṇḍa-karmika. Aś, 5.1.
(16) 以上 9.5.13—29.
(17) Aś, 9.6.11—15.
(18) 実は征服者のスパイだが、その指導者のスパイとして働く⁽⁵³⁾。
(19) 以上 9.6.28—57.
(20) 以上 9.6.63—72.
(21) 拙稿「アルタシャーストラにおける saṅgha の意味」『印仏研』32—1。「アルタシャーストラにおけるサンガ対策」(『壬午博士頌寿記念論文集』)。
(22) 以上 11.1.6—56.
(23) Aś, 12.2.8—9.
(24) bhāryā-vyāñjana. カングレーは、女スパイが長期間かけて高官の妻になると解するが、女スパイが一時的に高官の妻に変装するにとった方が自然であろう。
(25) 「王の留守中、都市を」一時的にする者」(NSV, p. 412, fn. 4). Cf. 9.3.10 etc.
(26) 以上 12.2.11—31.
(27) senāmukhya-praktipuruṣa. カングレーは、「軍の長(mukhya)」の下の「高官(praktipuruṣa)」と解するが、⁽⁵⁴⁾ dvandva とした方がよい。⁽⁵⁵⁾ *śrīmāla* 註は prāṇi を大臣だとする。
(28) 以上 12.3.1—21.
(29) daṇḍamukhya-vyāñjana. カングレーはスパイが長期

間かけて軍の高官になると解するが、そのようなことは不可能であろう。軍の高官に変装するにとる方が自然。
(30) cūchundari. シャンシャーストリ、カングレーとも「musk-rat」と訳す。Cf. S.C. Banerji, *Flora and Fauna* (Calcutta, 1980), p. 134: Mole (ヤンバ) *Talpa micrura*, Shrew (トリスネキ) *Suncus caeruleus*. このネキの亜種は動物を注わ⁽⁵⁶⁾。Cf. Aś, 14.1.29.

(31) udaka-carāṇa. Cf. 13.1.3—5.

(32) 以上 12.4.4—28.

(33) tulya-yogakṣema. 共通の利害関係を持つこと⁽⁵⁷⁾。Cf. 8.2.7. カングレー訳「[以前と同じ]安寧」及び彼の注は不適切。

(34) Aś, 1.14.6ff.

(35) 以上 13.1.1—20.

(36) Cf. 14.2.18—26.

(37) Cf. 1.12.1; 5.2.59.

(38) Cf. 14.2.25.

(39) Cf. 14.2.34.

(40) 以上 13.2.1—35.

(41) プラチニョータ王がこの策略により、象を好むウダヤナ王をおびき寄せて捕えた伝説は有名。

(42) gūḍha-bhitti. Cf. 12.5.3 etc.

(43) 以上 13.2.39—49.

- (44) 以上 13.3.1—15.
 (45) 以上 13.3.33—35.
 (46) 以上 13.40—47.
 (47) 以上 13.3.51—58. この個所で活躍するスバイは *apasarpa* と呼ばれている。カンダレーは、*‘apasarpa* は主として滅ぼそうとする対象である人々の気に入られそうとするエージェントたち」とするが、*AS* 全体では、*gūḍha-purusa* (スバイの総称) と同義で用いられている。「上」の註(6)参照。
 (48) *AS*, 13.4.16.
 (49) *AS*, 13.4.41. この個所は疑問であるが、前後の文脈からこのように理解すべきであろう。
 (50) *AS*, 13.5.9.
 (51) *Sattin* と同じ。
 (52) 以上 14.1.2—3.

(かみむら かつひこ・国学院大学助教授)

〔付記〕 本稿は拙訳『カウティリヤ実利論』(岩波文庫)の出版以前に書かれたものである。